町田宗鳳・広島大学名誉教授に聞く

昨春、富士山を望む御殿場高原に建立された超宗派の「ありがとう寺」開祖に迎えられた町田宗鳳・広島大名誉教授を同寺に訪ねた。近著の『異界探訪』に沿って話を伺うためである。禅堂を中心に護摩堂やイワナガヒメを祀るありがとう神社などがあり、禅堂では企業のセミナーが開かれていた。（多田則明）

無意識にある異界

――先生は内外のパワースポットを訪れていますが、異界は人間自身の中にもあるのではないですか。

まさに無意識のことですね。ユングは、意識と無意識を統合しないと心の病気になると言いました。意識には潜在意識もあり、無意識には個人無意識と普遍無意識があります。現代人は頭でっかちになり、表層の自我意識だけで生きようとするから、全部、自分で判断して行動し、結果を出さなければならず、すごくつらい人生になっています。うまくいかないと自分を責め、苦しむことになるのです。

そうではなく、意識は氷山の一画なのだから、無意識に自分を委ねていく生き方があるのではないか。無意識の中にはいろいろな記憶があるので、否定的な記憶に振り回されたらいけないのですが、意識に比べて何しろ馬力が違います。古代インドの唯識学の僧、世親（ヴァスバンドゥ）が「阿頼耶識は暴流のごとし」と言ったのは、今風に言えば「津波のごとし」でしょう。誰も抗うことはできない、爆発的なエネルギーを持っているのが無意識です。それを使わないと、小手先の人生になってしまいます。

現在は学歴社会で、高学歴の人が社会のリーダーになっていますが、私は間違っていると思います。学歴や知識はあってもいいのですが、無意識とコミュニケートできる人がリーダーシップを発揮しないと、社会はいい方向に進みません。松下幸之助は尋常小学校を四年で中退し、九歳で火鉢店に丁稚奉公に出されていますが、自分の直感で商売を発展させ、パナソニックという大企業をつくりました。彼自身、商売は八割から九割は直感でやってきたと言っています。今のサラリーマン社長がよく判断を誤って不祥事を起こし、あるいはリーマンショックのような大波に呑まれてしまうのは、彼らの多くが自我意識が突出した学歴エリートだからです。無意識とつながっていれば、もっと腰を据えて判断することができます。

悟りにいたる十の段階を描いた、北宋時代の臨済宗禅僧・廓庵「十牛図」の最後に出てくる入鄽垂手（にってんすいしゅ）は、布袋腹の「痴聖人」が市井に出て少年から貰い物をしている絵で、悟りを開いたとしても、そこに止まっていては無益で、再び世俗の世界に入り、人々に安らぎを与え、悟りへ導く必要があると解釈されています。

ありがとう寺を建てた㈱時之栖（ときのすみか）の庄司清和会長も、東京農業大学を卒業していますが経営の勉強をしたことはありません。一九七五年に沼津市で食肉加工卸業を創業し、六九年に米久㈱を設立して一部上場企業にし、九四年に時之栖を設立して地ビールの醸造を始め、九九年には米久の持株を売却し、御殿場高原の約十万坪の敷地に、複数のホテル、温泉施設、レストラン、サッカー場、美術館などをそろえた「三世代のテーマパーク」を整備し、年間約百八十万人が訪れる癒やしのスポットを造りました。直感経営で年商百数十億円のビジネスを動かしています。戦後の日本はそうした経営者が支えてきたのですが、今のサラリーマン社長では革命は起こせず、日本経済は停滞したままです。

私が『異界探訪』という不思議な本を書いたのは、心霊現象に関心をもってもらうためではありません。そうではなく、無意識の自然とコミュニケーションできるような人間性を養ってほしいと思うからです。そうしないと、近代文明はますます没落していきます。この本を読んで、町田は学者と思っていたが、こんなオカルト世界に生きているのかと不信する人がいるかもしれませんが、それは浅読みです。

この本の真意は文明論で、今は文明の転換期だ中で、次世代の文明に対する準備をしなければならない時代です。私の考えでは、新しい文明が台頭する時代には、必ず新しい科学・技術の革命が起こります。エネルギー革命も起こり、ガソリンも主役の座を譲るでしょう。医療も変わります。集中講義をして、「フィロソフィー・オブ・ワンネス（一の哲学）」と説明していますが、自分の直感で商売を発展させ、パナソニックという大企業をつくりました。彼自身、商売は八割から九割は直感でやってきたと言っています。今のサラリーマン社長がよく判断を誤って不祥事を起こし、あるいはリーマンショックのような大波に呑まれてしまうのは、彼らの多くが自我意識が突出した学歴エリートだからです。無意識とつながっていれば、もっと腰を据えて判断することができます。

悟りにいたる十の段階を描いた、北宋時代の臨済宗禅僧・廓庵「十牛図」の最後に出てくる入鄽垂手（にってんすいしゅ）は、布袋腹の「痴聖人」が市井に出て少年から貰い物をしている絵で、悟りを開いたとしても、そこに止まっていては無益で、再び世俗の世界に入り、人々に安らぎを与え、悟りへ導く必要があると解釈されています。

ありがとう寺を建てた㈱時之栖（ときのすみか）の庄司清和会長も、東京農業大学を卒業していますが経営の勉強をしたことはありません。一九七五年に沼津市で食肉加工卸業を創業し、六九年に米久㈱を設立して一部上場企業にし、九四年に時之栖を設立して地ビールの醸造を始め、九九年には米久の持株を売却し、御殿場高原の約十万坪の敷地に、複数のホテル、温泉施設、レストラン、サッカー場、美術館などをそろえた「三世代のテーマパーク」を整備し、年間約百八十万人が訪れる癒やしのスポットを造りました。直感経営で年商百数十億円のビジネスを動かしています。戦後の日本はそうした経営者が支えてきたのですが、今のサラリーマン社長では革命は起こせず、日本経済は停滞したままです。

私が『異界探訪』という不思議な本を書いたのは、心霊現象に関心をもってもらうためではありません。そうではなく、無意識の自然とコミュニケーションできるような人間性を養ってほしいと思うからです。そうしないと、近代文明はますます没落していきます。この本を読んで、町田は学者と思っていたが、こんなオカルト世界に生きているのかと不信する人がいるかもしれませんが、それは浅読みです。

この本の真意は文明論で、今は文明の転換期だ中で、次世代の文明に対する準備をしなければならない時代です。私の考えでは、新しい文明が台頭する時代には、必ず新しい科学・技術の革命が起こります。エネルギー革命も起こり、ガソリンも主役の座を譲るでしょう。医療も変わります。集中講義をして、「フィロソフィー・オブ・ワンネス（一の哲学）」と説明していますが、自分の直感で商売を発展させ、パナソニックという大企業をつくりました。彼自身、商売は八割から九割は直感でやってきたと言っています。今のサラリーマン社長がよく判断を誤って不祥事を起こし、あるいはリーマンショックのような大波に呑まれてしまうのは、彼らの多くが自我意識が突出した学歴エリートだからです。無意識とつながっていれば、もっと腰を据えて判断することができます。

悟りにいたる十の段階を描いた、北宋時代の臨済宗禅僧・廓庵「十牛図」の最後に出てくる入鄽垂手（にってんすいしゅ）は、布袋腹の「痴聖人」が市井に出て少年から貰い物をしている絵で、悟りを開いたとしても、そこに止まっていては無益で、再び世俗の世界に入り、人々に安らぎを与え、悟りへ導く必要があると解釈されています。

ありがとう寺を建てた㈱時之栖（ときのすみか）の庄司清和会長も、東京農業大学を卒業していますが経営の勉強をしたことはありません。一九七五年に沼津市で食肉加工卸業を創業し、六九年に米久㈱を設立して一部上場企業にし、九四年に時之栖を設立して地ビールの醸造を始め、九九年には米久の持株を売却し、御殿場高原の約十万坪の敷地に、複数のホテル、温泉施設、レストラン、サッカー場、美術館などをそろえた「三世代のテーマパーク」を整備し、年間約百八十万人が訪れる癒やしのスポットを造りました。直感経営で年商百数十億円のビジネスを動かしています。戦後の日本はそうした経営者が支えてきたのですが、今のサラリーマン社長では革命は起こせず、日本経済は停滞したままです。

私が『異界探訪』という不思議な本を書いたのは、心霊現象に関心をもってもらうためではありません。そうではなく、無意識の自然とコミュニケーションできるような人間性を養ってほしいと思うからです。そうしないと、近代文明はますます没落していきます。この本を読んで、町田は学者と思っていたが、こんなオカルト世界に生きているのかと不信する人がいるかもしれませんが、それは浅読みです。

この本の真意は文明論で、今は文明の転換期だ中で、次世代の文明に対する準備をしなければならない時代です。私の考えでは、新しい文明が

まちだ・そうほう
1950年京都生まれ。14歳で出家し、20年間、臨済宗大徳寺で修行。34歳で渡米し、ハーバード大学で修士号、ペンシルベニア大学で哲学博士号を取得。シンガポール国立大学、東京外国語大学で教え、広島大学大学院総合科学研究科教授を経て、現在は同大名誉教授。天台宗僧侶で、御殿場に開かれたありがとう寺の開祖。比較宗教、比較思想、生命倫理が専門。「ありがとう禅」「ありがとう断食セミナー」「心のケア合宿」を主宰している。

人間にとって異界とは何か
無意識の底にある「光の意識」

自然と通じ合う人間

――アメリカの女性脳科学者ジル・テイラーの『奇跡の脳』（新潮文庫）によると、三十七歳で脳卒中に倒れ、左脳の機能がほぼ失われた彼女は、その時の状況を「まわりの空間や空気の流れに溶け込んでしまい、もう体と他の物との区別がつかなくなりました。時間も止まり現在の瞬間だけです。意識のレベルが下がっていく中で、ある種の解放感と変容する感じに包まれて、自分が宇宙と一体化していくようです。ところが、そうした垣根を取り払うことで類人猿の実態が明らかになり、次第に欧米の学者にもその手法が受け入れられるようになったそうです。

心理学者の河合隼雄さんの兄で霊長類学者の河合雅雄さんもチンパンジーになりきって研究していて、個体識別ができ、名前を付けています。そんなことができるのは日本人のサル学者だけだそうです。そんな能力と感性を持った人が京大総長になっているところに日本の一つの希望があります。

――昨日（九月十四日）あった京都大学東京フォーラム「これからのいきかた」で挨拶した山極壽一総長は、「超高齢社会は日本人がいきかたを考え直すべきチャンスで、これからの社会のモデルになれるか世界が注目している」と話していました。急激な人口減少と高齢化で、就業や介護、医療、まちづくり、交通などの仕組みを見直さないと、社会が崩壊するという危機感があります。「いきかた」には「生き方」から。それだからこそ密教の祖になれたと思います。

戦後、日本はアメリカに席巻され、アメリカ的な合理主義でここまで来たので、密教のような日本の根幹にある思想はあまり世界に発信しませんでした。自然や宇宙とつながっている日本人の感覚が思考の中心にあることを、そろそろ自信をもって語るべき時を迎えています。新しい技術としてはAIやロボット、iPS細胞などにその萌芽が見られます。

残念ながら、中国にはそういう感覚がほぼ途絶えているようです。文化大革命のショックから改革・開放政策以降、マテリアリズム（物質主義）の傾向が強まり、古代からの文明の流れが断ち切られています。次の時代のスーパーパワーになるのは間違いないでしょうが、新しい文明の主役になれるかは疑問です。日本はそんな中国と競争するのではなく、小さなギリシャがローマ帝国の中で文明を発展させたように、アメリカ一辺倒の道から方向転換することを考えてもいい。

――イグノーベル賞の受賞者に日本人が連続しているのも面白い。今年、医学教育賞を受賞したのは長野県駒ヶ根市にある昭和伊南総合病院の堀内朗医師で、座った姿勢で自分で内視鏡を操作し大腸検査をするもので、理事無礙法界で、理が消えたのは神が要らないという意味です。それは大笑いしていました。

大阪のクリニックの医師、木俣肇さんは、キスによってアトピー性皮膚炎のアレルギー反応が弱まることを研究で明らかにしたことで、二〇一五年の医学賞を受賞しています。本当に真剣勝負の世界ですから。ストレスがなくなって気持ちいいのは α波の段階で、θ波まで行かないと自然との対話も成立しません。争いのなかった縄文人はほとんどα波で暮らしていたでしょうし、アメリカ先住民も同じです。その中で時々トランス状態になると、θ波になっていた。今、縄文時代に魅力を感じているのは、心理的なノスタルジーからでしょう。

十八年前に『縄文からアイヌへ 感覚的叙知の系譜』（せりか書房）を出したのですが、早すぎて少ししか売れませんでした。今だったら売れたかもしれない。（笑い）

――岡山県新見市に創作の縄文土器や土偶の猪風来（いふうらい）美術館を開いている猪風来さんは、縄文人を知るには縄文時代を体験するしかないと、家族と十年間、北海道で暮らし、野焼きで製作した作品群を新見市の廃校になった小学校を改装して展示しています。秋には陶芸家仲間と縄文式の野焼きを実演します。

縄文時代の考古学的な研究は進んでいますが、縄文人の精神文化や知恵が現代にどんな意味があるのかなどの研究は少ないようです。私もかかわっているふじのくに地球環境史ミュージアムの安田喜憲館長は思想的なことも語りますが、普通の考古学者はそこまであまり言いません。山極さんのゴリラからにせよ、土偶からにせよ、やはり目指しているのは無意識の発掘ですね。

ゾーエーとビオス

――現代人が今の暮らしを保ちながらそういう感性を開発するには、どうすれば？

暮らしに便利さを追求するのは止められないので、まずは自然と通じ合える自分の感覚的な機能に気づくことです。そしていろいろな方法でそれを鍛えるようにする。近代文明を否定する必要はないし、できないのですが、一種の遮断療法は必要です。その一つが私がやっている二泊三日の「ありがとう断食」です。飲酒や肉食をやめようとは言いません。グルメも楽しみながら、時々は食べることをやめてみる方が、健康のバランスを保つのに適しています。

――私も十年前の五月に先生の二泊三日の断食に参加して、体重が三キロ減っただけでなく、感性が正常化したのか、秋の健康診断で精密検査の要ありとされ、翌年一月の内視鏡検査で胃がんと診断され、すぐ手術しました。三分の二切除しましたが、ステージ1で転移はなく、以後正常です。約二十人が一緒に断食し、一斉に「ありがとう」を唱え、読経するのもよかったですね。思いがつながっているという一体感があり、読経では倍音が聞こえてきたりしました。

昨日も教えていた北欧の学生に言われたのは、日本人はなぜ有給休暇を取らないのか。自然が豊かな北欧では、休暇を取って家族で自然に親しむのが普通です。ログハウスのような別荘でサウナに入り、湖で釣った魚を味わう。私が『野生』の哲学―生きぬく力を取り戻す（ちくま新書）で書いたような暮らしです。

――知人の曹洞宗の僧侶は、不登校児を集めて無人島でサバイバルキャンプをしていました。

子供は本来、野生に近いのですが、ゲームや塾など不自然な環境に置いているのが問題です。そのため、持って生まれた生命力が萎えてしまっている。

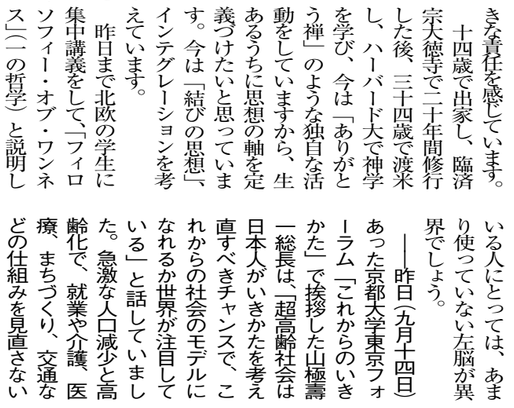
――看取り士の活動をしている知人は、死者との対話の継続が大切だと言っています。

それは私が『死者は生きている：「見えざるもの」と私たちの幸福』筑摩書房）で書いたことです。魂は無意識の世界ですから、肉体のように火葬場で焼けてなくなることはありません。

古代ギリシャにはゾーエーとビオスという二つの生命概念がありました。ビオスは生物学的な個体生命でゾーエーは永遠の命ですが、後者には科学的エビデンスがないので、近代はそれを切り捨ててきました。永遠の命は信仰上の架空のことであって、実態はないとされたのです。

古代人はゾーエーが感覚的に分かっていたので、縄文時代の遺体は、すぐに帰って来るからと浅く埋められ、亡くなった赤ちゃんは玄関に埋め、母親の股に帰りやすくしていました。それが後に常世（とこよ）の思想になり、死者は海か山の向こうに行くが、すぐに帰って来るという来世観になったのです。そういう生命観になると、延命措置に大金を投じるような医療は必要なくなります。

亡くなった人たちは一杯私たちにささやいているはずです。しかし、私たちが聞く耳を持っていない。ゾーエーを認めるような生命観に転換していく必要があります。



禅堂

――一燈園の西田天香は「お光り」と言っています。大自然、神、仏の意味です。

イスラーム神秘主義のスーフィーも回旋舞踊やズィクルと呼ばれる祈祷句を読み上げる行を通して光と一体になるのを目指します。臨死体験では、暗いトンネルを抜けると光に出会うのが共通していますが、暗いトンネルは無意識のことで、その先に光があるのです。明恵上人は光の仏を見る「仏光観」を唱えていますので、光はどの宗教にも共通しています。それは無意識の底にある光です。

話を戻すと、禅はまだ浅いと思います。鈴木大拙や弟子丸泰仙などの活躍から禅宗です。近代合理主義の中で神を信じられなくなった西洋人が、神が不在でも生きていける思想として禅を求めているようです。

――日本仏教で世界に知られているのは、鈴木大拙や弟子丸泰仙などの活躍から禅宗です。近代合理主義の中で神を信じられなくなった西洋人が、神が不在でも生きていける思想として禅を求めているようです。

華厳哲学には四種法界という教えがあり、事法界、理法界、理事無礙法界に続く四番目が事事無礙法界です。事法界は物質世界のことで、理法界とは法則の世界、理事無礙法界とは法則が物質世界に現れている世界で、自我の境界が曖昧になり、流動化し分散して、世界の諸対象と自分との関係も境界を失っていくのが事事無礙法界で、理が消えたのは神が要らないという意味です。それを私は『人類は「宗教」に勝てるか 一神教文明の終焉』（NHKブックス）で無神教的コスモロジーと呼びました。そこに至らないと文明の共存は不可能です。理を語ると、それぞれの神が唯一絶対、ベターな存在になりますから。そういう思想は時代遅れで、それぞれの個性が共存する世界にしていかないといけない。

しかし、人間は弱いので、神・絶対者を必要としている面もあります。そこで私は、そうした存在を「光の意識」と呼んでいるわけです。無意識の底にあるものです。フロイトやユングは無意識の膨大さを語っていますが、無意識の底を語った人はまだいません。

――アミターバ（阿弥陀如来）のことですか。

無碍光如来ですから、昔の人はそう表現したのです。それを、仏心や仏性、聖霊など宗教用語にすると壁を作ることになるので、あえて「光の意識」と言うのです。法然が、念仏を唱えたら百人が百人とも西方浄土に行くと言ったのは、阿弥陀如来の光に包まれるという考えです。これを世界に伝えていくのが私の悲願です。異界探訪はその入り口で、無意識の底から光が漏れているのに気付いてほしい。世界に伝えるため、そんな本を英語で書く準備をしています。

――一燈園の西田天香は「お光り」と言っています。大自然、神、仏の意味です。

イスラーム神秘主義のスーフィーも回旋舞踊やズィクルと呼ばれる祈祷句を読み上げる行を通して光と一体になるのを目指します。臨死体験では、暗いトンネルを抜けると光に出会うのが共通していますが、暗いトンネルは無意識のことで、その先に光があるのです。明恵上人は光の仏を見る「仏光観」を唱えていますので、光はどの宗教にも共通しています。それは無意識の底にある光です。

話を戻すと、禅はまだ浅いと思います。鈴木大拙や弟子丸泰仙などの活躍から禅宗です。近代合理主義の中で神を信じられなくなった西洋人が、神が不在でも生きていける思想として禅を求めているようです。

――日本仏教で世界に知られているのは、鈴木大拙や弟子丸泰仙などの活躍から禅宗です。近代合理主義の中で神を信じられなくなった西洋人が、神が不在でも生きていける思想として禅を求めているようです。

華厳哲学には四種法界という教えがあり、事法界、理法界、理事無礙法界に続く四番目が事事無礙法界です。事法界は物質世界のことで、理法界とは法則の世界、理事無礙法界とは法則が物質世界に現れている世界で、自我の境界が曖昧にな

富士山を望む護摩堂

SCREEN スクリーン

ニューヨーク、ジャクソンハイツへようこそ

ジャクソンハイツの通り＝ⓒ 2015 Moulins Films LLC All Rights Reserved

167の言語が飛び交う移民の町

ニューヨーク市クイーンズ区の北西にあるジャクソンハイツの人口は約十三万人。百年前に、マンハッタンへ通勤する中産階級向けに宅地開発されたが、下鉄で中心部へ三十分という便利さが人気を集め、大資本が進出し、再開発が進んでいる。

ドキュメンタリーの巨匠、八十八歳のフレデリック・ワイズマンがそんな町の様子を九十時間のシーンを十カ月の編集で映像化した。ナレーションは一切なく、事実の断片の積み重ねで、今のアメリカを生き生きと表現している。

ジャクソンハイツでは百六十七の言語が話され、中南米各国からのラテン系の人々をはじめ、パキスタン、バングラデシュ、インド、タイ、ネパール、チベットの人々からなるコミュニティが形成されている。古くからの住民は、初期の移民の子孫であるイタリア人、ユダヤ人、アイルランド人で、移民国家アメリカを象徴する町と言える。

作品は文字通りのドキュメントで、通りの様子から衣料品店、コインランドリー、ベーカリー、レストラン、スーパーマーケットなどの商売、モスク、寺院、教会などの宗教施設のシーンが延々と続き、住民たちの会話から、彼らの暮らしを脅かしている再開発が語られる。さらに、LGBTや貧困、移民排斥、高齢化など、今のアメリカが直面している諸問題が、当事者の口から告げられる。

ニューヨークの下町を歩くと、この国が移民たちによってつくられたことが実感できる。人種のるつぼと言われたり、そうではないサラダボウルだと言われたりするが、それぞれの歴史と文化を背負い、渡ってきた国で懸命に生きていることに違いはない。そんなコミュニティの状況を説明するには、ドキュメンタリーが最適なのだろう。

その編集作業をワイズマン監督は、場所の記憶とラッシュフィルムの中にある記録、自身の一般的な経験との〈対話〉だとし、「その〈対話〉から形を見つけ、この映画の制作経験から私が学んだことを表現している」と言う。本作は、世界で最も偉大なドキュメンタリー作家と称される彼のドキュメンタリー四十作目。監督は、二〇一四年にはヴェネチア国際映画祭で金獅子賞（特別功労賞）を、一六年にはアカデミー賞名誉賞を受賞している。

十月二十日（土）よりシアター・イメージフォーラムほか全国順次ロードショー。